

ーシアとは歴史を異にするサバでは、第二次大戦後の出生地や言語を核に新たにサバ・ネイションを創出しようとする試み、イスラム教を核とした広範な連帯を求める試み、マレーシア加入後のサバ人のサバを訴えて半島の民族と同じバンサの地位を求める試みなど、独自のネイションが模索された。現在では、宗教、出自、国籍を横断するオラン・キタ（Orang Kita）という概念が出現しており、山本はそこに特定の敵を想定しない新たなナショナリズムの萌芽を見いだしている。

第8章では、西芳実が2006年のアチェ統治法の制定に至る過程をとりあげ、インドネシアにおけるアチェ民族を求める動きを描いた。長期にわたる内戦の後、インドネシア政府との平和協定により成立したアチェ統治法では、①現住地にかかわらず血統にもとづく「アチェ人（Orang Aceh）」と、②現在の居住者である「アチェ住民（Penduduk Aceh）」という2つの範疇が設けられた。これにより、在住のジャワ人に住民としての地位を保証しつつ（②）、単一のバンサが前提とされるインドネシアで事実上のアチェ民族の認定を勝ち取った（①）。

第9章では、川島縁が南部フィリピン・マラナオのムスリムの民族概念の変遷を扱った。20世紀初頭のアメリカ統治期、彼らは祖先を共有する集団を意味したバンサに英語のネイションの概念を取り入れ、自らをバンサ・イスラムと名乗った。1960、70年代には、モロ民族解放戦線がバンサ・モロという概念を使用するようになったが、その主張のなかにはカイロに赴いた留学生によって祖国（Watan）などのアラビア語の概念が取り込まれた。こうした英語やアラビア語の概念の受容により、重層的なバンサ概念が発展していった。

海域世界である島嶼部東南アジアは社会の流動性、多民族性が大きな特徴であり、人間集団の枠組みや形成のあり方が研究関心を集めてきた。特にマレー（ムラユ）という概念をめぐってはナショナリズム論、前近代のマレー世界論など多くの研究蓄積がある。ただし、こうした議論は概念の定義や範囲をめぐる議論に終始してしまうと堂々巡りに陥る危険をはらんでいる。本書は、特定の集団ではなくその枠組み（バンサ、ウンマ）に焦点をあてることで本質論に陥ることを避け、個別の事例から非ムスリムも含めた地域における社会秩序の形成過程を通時代的に描いている。

本書の内容からは、書名の2つキーワードのうちバンサの方に重点が置かれた印象をもたれるかもしれない。結果としてウンマが前面に出される事例が少なかったのは、各執筆者がイスラムから地域を見るというよりも地域からイスラムを見ることでそれぞれの社会を描くことを試みたためと思われる。各論では、少数派や外来者が地域の社会秩序の形成にどうかかわるのかという問題意識が共有されており、本書は全体と

して、民族や宗教を問うというよりも島嶼部東南アジアの地域像を問う試みと位置づけることができよう。

こうした地域像に関する研究を発展させていくには、今後さまざまな研究との相互参照・比較を行っていく必要があろう。たとえば、政治秩序のみならず、経済活動と集団概念との関係という視角からも検討する余地があるように思われるし、島嶼部東南アジア以外の地域の事例と比較する可能性も考えられる。本書の成果を出発点として、さまざまな方面との議論が活発化することを期待したい。

（連絡先：[REDACTED]）

東賢太朗 著

『リアリティと他者性の人類学 —現代フィリピン地方都市における呪術のフィールドから』

三元社 2011年 374ページ

関 恒樹

本書は、「呪術とは何か」という問いに真正面から取り組んだ民族誌である。そこでは、呪術的思考、想像力そして実践が、時に否定しがたいリアリティをもって我々に迫ってくる一方、我々による安易な理解を常にすり抜けてゆくような他者性を併せ持つ様態が、フィリピンのカピス州ロハス市からの事例に基づいて解き明かされる。

本書序論は、著者自身が調査地で経験した3つの興味深いエピソードから始まる。そこには妖術や呪術、あるいは憑依による啓示という現象に著者自身が当事者として巻き込まれ、消し去りがたい不安や恐怖を感じてしまった経験が語られている。このような本書冒頭の個人的エピソードには、呪術とは「いつもすぐ近くで私たちを待ち受けている」ものであり、我々の日常の重要な部分を構成するものであるという本書全体を貫く視座が現れている。さらに、本書の理論的アプローチとして主張されるのが、「呪術の実体論」である。そこで批判されるのは、呪術を「機能」や「象徴」に回収してしまう立場、さらには呪術を近代に対するメタ・コメントとして「道具論的」に操作し、近代的合理性に包摂する立場である。それら先行研究の議論に対し、本書は、我々にとっての呪術経験や実感から生まれる呪術の切実な実体性に基づきな

がら、呪術という「語りえないもの」の不可能性そのものに向か合おうとする。それは呪術実践者としての彼ら（呪術師、患者、信者、村人などの当事者たち）と、我々（調査者と民族誌の読み手）の間に生成する「実感の共同性」によって可能となる。そこで共有されるのは、呪術を前にして抱かざるをえない「そんなはずはない、だがしかし……」という実感である。そして、そのような共同性においてこそ、インコグニト（識別不能なもの）としての他者との、境界域における出会いとコミュニケーションが可能になるとされる。

第1部では、アスワンと呼ばれる妖術師が考察の対象とされる。著者は、先行研究においてアスワンが「吸血鬼」などの「妖怪」として一般論的に描かれてきたことの問題性を指摘する。そこでは、実際には共同体の一員として生活するアスワンの個別性が捨象され「脱文脈化」されると同時に、正統カトリック神学による周縁化が行われている。このような先行研究の抱える問題性を指摘しつつ、著者は、アスワンについての伝承や信仰を、コミュニティの当事者たちの「経験談レベルの語り」へと重心をずらして捉えることが必要であると論じる。そのような視座が遺憾なく發揮されているのが、アスワンであると噂される人物マリア（第5章）とハンス（第6章）の淡々とした日常に関する丹念かつ微細な記述である。そこには、我々の抱く「なぜ」という問いそのものが成立しない、厳とした「アスワンとしての日常」と、錯綜した人間関係によって構成される「呪術の実践共同体」における多元的現実構成が論じられている。

第2部においては、カトリック教会の指導下にありつつも、しばしば「異端」として非難される調査地ロハス市のカリスマ刷新運動 Divine Mercy を事例として取り上げ、時に齟齬や不整合を生じる正統派カトリック教会との関係が論じられる。議論の焦点は、カリスマ刷新運動が行う「憑依による啓示」とヒーラーによる「癒し」である（第9章）。「憑依による啓示」と「癒し」は、カリスマ刷新運動メンバーの間に圧倒的な宗教的リアリティをもたらす重要な活動であるが、同時に正統派カトリック教会からは「異端」という非難が集中する要素でもある。このような宗教的リアリティと正統派からの客観的判断のはざまで、単にカトリックの公式教義に追随するのではなく、むしろ絶え間なき微細な交渉によってそれをずらしてゆく人々の実践が論じられる。

第3部は、調査地でメディコと称される呪医に関する民族誌である。カトリック教会からは「異端」として、さらに近代医療従事者からは「偽医者」として周辺化される呪医メディコが、どのようにしてその活動（具体的には病治し、供物儀礼、占い、

呪い）の場を確保しているのかに焦点が当てられる。そこで注目されるのが、カトリック教会や近代医療などによる支配的言説に対し抵抗するのではなく、むしろ身を添わせることにより結果として活動の継続が可能になるような効果としてのメディコの「親密性」であり、支配側の設定した枠組みの内部からその境界を少しだけずらしてしまうような微細な交渉の実践である（第13章）。第14章では、患者の側に焦点を当て、彼らが近代医療、カトリック・カリスマ刷新運動、そしてメディコという異なる医療資源のどれか一つを特権化することなく、それらの間を横断しつつ病からの解放を求めてゆくような、多元的医療体系がいかにして可能なのかが、病の症状（シニフィエ）に対する、病の解釈と意味（シニフィアン）の過剰という様態に注目して議論される。

最終章の第15章では、全体の結論として、本書の提唱する「呪術の実体論的アプローチ」から浮かび上がる、呪術のリアリティと他者性についての考察がなされる。そこでは、本書で示された呪術的諸実践は、どれも完全に非合理なものでも、完全に超越的なものでもなく、むしろ生活内の状況、便宜、必要といった合理性と内在性に基づいていたことが確認され、恐れ、救いへの願い、癒しへの希望といった当事者にとっての実感や経験という実体性に注目したとき、呪術について非合理と合理的の差異は無化され、世界への内在と超越が同時に成立するような展望がひらけるとされる。このような呪術の実体論は、呪術を飼いならすよりも、むしろその不可能性と不可解さそのものに取り組む必要性を我々に示唆している。そして、著者はジジェクやデリダなどのポスト構造主義思想を援用しつつ、呪術がイデオロギー装置として我々を拘束するものであると同時に、根源的な偶有性をもつ「差延」として、「そうではなかったかもしれない」可能性へと解放する作用であると論じる。すなわち呪術の実体とは、「恐れる」「救われる」「癒される」というリアリティに基づく強靭なイデオロギー的拘束と、インコグニトで識別不能な他者性による解放が同時に可能となる人間の心意のあり方なのであると論じられる。

以上のような内容を持つ本書は、妖術師、カリスマ刷新運動メンバー、呪医といった決して接近しやすいとはいえない調査対象の微細な日常世界に迫り、彼らを取り巻く当事者たちによって構成される多元的現実世界を描き切った民族誌として高く評価することができよう。特に、村落内における恐怖と忌避の対象である「アスワン」本人の日常世界、カリスマ刷新運動の入会式における憑依や癒し、そして呪医メディコをめぐる諸アクター間の微細な相互交渉などに関する詳細な民族誌は、フィリピン低地キリスト教社会研究における重要な貢献であり、著者と調査地の人々との確固とし

た信頼関係なしには成しえなかつた貴重な成果であるといえよう。その記述からは、様々な呪術実践が、「合理／非合理」「内在／超越」「日常／非日常」「正統／異端」などの硬直化した二文法を微妙に、しかし継続的にずらすことで可能になる状況が理解できる。このように、先行呪術研究によって構築された「体系」の中には回収されず、したがつて「呪術」とすら名付けられていない混沌とした諸実践が持つ豊饒な意味世界の解明に本書は成功しているといえよう。

しかしながら他方で、本書の民族誌によって可能となる我々と「インコグニトな他者」とのコミュニケーションとはいかなるものなのか、という疑問が残る。本書が主張するような、呪術をめぐって生起する「実感の共同性」においてこそ、いわば地続きの呪術理解、あるいは我がこととしての呪術理解が可能になるという感触を得つつも、自己と他者との間の「差延」「偶有性」「識別不能性」をそのままのものとして受け入れつつ、なおかつ可能となるコミュニケーションとはいかなるものであろうか。確かに、「『わかる』ことと『わからない』ことの間に身を置き続ける勇気」〔東 2008: 111〕の必要性を感じつつも、どこか着地点が見えないまま宙吊り状態にされた感を禁じえないはなぜだろうか。評者もかつて、フィリピン・ビサヤ地方の農漁村において、村人の様々な呪術的な語りや行いに直面しつつ、「そんなはずはない、だがしかし……」という揺れと、同時にそれらが持つ圧倒的なリアリティを感じざるをえなかつた。そのリアリティに対して評者は、「村落内の日常に出現する裂け目」に対する解釈の試みだと、人々の間で求心的に作用する「集合的記憶」という説明（＝「理解」）を与えたのだが〔関 2007〕、このような議論は、本書の立場からすれば、呪術に対する「道具的」理解、あるいは合理性への包摂として退けられであろうか。しかしながら、呪術に関して我々と彼らの間にどのような「コミュニケーション」や「理解（あるいはその否定としての「非－理解」や「反－理解」）」が成立するのか、本書を読んだ後もこの問いは解消されないまま残される。あるいは本書が述べるように、この問いをそのまま抱えつつ、「自己と他者の間を離れ動きながら何かしらの人間理解に到達しよう」とする、理解と非－理解の往還としてのみ、文化人類学的研究は可能なのかもしれない。

参考文献

- 東賢太朗. 2008. 「呪術・他者・理解：ポスト／構造主義と、あるエピソードを経由して」『社会人類学年報』34: 93-117.
 関恒樹. 2007. 『海域世界の民族誌：フィリピン島嶼部における移動・生業・アイデンティ

イティ』世界思想社.

(連絡先：[REDACTED])

伊東利勝 編著

『ミャンマー概説』

めこん 2011年 731ページ

藪 司郎

ビルマ／ミャンマー全般を扱った概説書は、最もよく知られている『もっと知りたいミャンマー』を含めて、近年出版されたものが3点ほどあった（注）。一昨年春に出了本書が新たに加わった。しかし、本書は今までの類書とは大きく異なつている。まず、外見上、700ページを超す大冊であること、ミャンマー国をビルマ族など8つの民族「世界」に分けそれぞれにほぼ同じ紙幅（おおよそ60～90ページ）を割いていくことが際立つている。内容面でも、執筆陣に現地人研究者を加えていることを含めて、今までとは違つた視点からミャンマー国全体を描き出そうとする編集上の野心的な試みが見られる。

本書の構成を見てみよう。冒頭に編者による「この本のねらい」が述べられている。序章「ミャンマー的国民国家の枠組」は領域、政治、経済政策、外交の4つの節に分かれる。第1章から第8章までは、ビルマ世界、モン世界、カレン世界、カヤー（カレンニー）世界、シャン（タイ）世界、カチン世界、チン世界、ヤカイン世界が充てられ、各章は、歴史、言語・文学・歌謡、宗教・信仰、民俗・芸能の4つの節に分けて述べてあり、社会、経済（第5、7、8章）、村の行政（第7章）などのほか、土着の儀式のルポルタージュ（第7章）が付け加わっている章もある。終章「官製民族世界の形成」は4つの節に分かれ、エーヤーワディー流域地方における国民国家の位相、ミャンマーのビルマ化、エスニック・マイノリティとしての対応、民主化と国民化について述べてある。巻末には、編者による「あとがき」のほか、写真・地図出所一覧と索引がついている。章、節ごとにそれぞれの分野の専門家が分担執筆している。我が国の研究者による執筆が適わぬ場合、現地の大学教員に執筆を依頼し、その分野

とうなん
東南アジア—歴史と文化—42

2013年5月30日発行

本体 4,200円

編集人 東南アジア学会 代表 弘末雅士

学会連絡先：〒606-8501 京都府京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学地域研究統合情報センター 山本博之研究室
<http://www.jsseas.org/>

発行所 株式会社 山川出版社

〒101-0047 東京都千代田区内神田 1-13-13
電話 03(3293)8131(営業) 振替 00120-9-43993

印刷所 株式会社 プロスト

Published by Yamakawa-Shuppansha, Ltd.
1-13-13 Uchikanda, Chiyoda-ku, Tokyo, JAPAN

© 東南アジア学会 2013 Printed in Japan

ISBN 978-4-634-68378-5